

神話の世界とその周辺

出雲が舞台となる神話：それは須佐之男命から始まった！



「出雲の神話」基礎知識

神話とは

自然や人間社会で起きたできごとを、神が行ったこととして伝えたものです。出雲地方を舞台にする神話は、『古事記』『日本書紀』『出雲国風土記』に書かれています。

『古事記』『日本書紀』に書かれた出雲の神話とは
 『古事記』は七十二年に、『日本書紀』は七十二年に完成した歴史書です。とくに『古事記』では、出雲を舞台にした神話が約三分の一も占めています。出雲が登場するのは両書とも須佐之男命が高天原から追放され出雲に降ってきたところから、大國主命の國譲りで終ります。しかし両書は、大國主命に関する記述で違いが見られます。

『古事記』に見られる出雲の神話	『日本書紀』に見られる出雲の神話
<ul style="list-style-type: none"> ・須佐之男命 ・出雲へ降る ・八俣大蛇退治 ・大國主命 ・稲羽の素戔 ・八十神の追害 ・根の國訪問 ・沼河比売への求婚 ・須勢理鹿売の嫁姑 ・大國主命の子孫 ・少名毘那神との國作り ・大年神の子孫 ・葦原中つ國の平定 ・國譲り ・天つ神の孫が日向へ降る 	<ul style="list-style-type: none"> ・八俣大蛇退治 ・記載なし ・葦原中つ國の平定 ・國譲り ・天つ神の孫が日向へ降る ・大社町史『を元に加筆』

『出雲国風土記』に書かれた神話とは

『出雲国風土記』は、出雲地域の産物、山川などの地名由来、古老が伝える伝承などを中心にした地方誌です。しかし八束水臣津野命の「国引き神話」は、朝鮮半島や北陸地方をも含んだ壮大な国土形成神話として、たいへん有名です。

須佐之男命の大蛇退治

故 避道はえん(追放されて)、出雲の國の肥の河上、名は鳥髮(鳥根)伊川の上流の船通山(といふ地に降りたまひき。この時著その河より流れ下りき。ここに須佐之男の命、人その河上にありと以爲して、尋ねもめて上り往きたまへば、老夫と老女と二人ありて、童女を中に置きて泣けり。(後略) (『古事記』)

スサノオノミコトとヤマタノオロチ

高天原(たかまがはら)神々が住む天上界(てんじょう)から追放されたスサノオノミコトは、出雲の肥の河(ひのかわ)上(うへ)の鳥髮(とりかみ)鳥上(とりかみ)の地(船通山)に降り立った。川に流れついた箸(はし)をたよりに河上に尋ねて行くと、老夫婦(らふふう)が一人の娘を中にして泣いていた。

名前を尋ねると、老夫婦は夫はアシナツチ、妻はテナツチ、娘はクシナタヒメと答えた。さらに泣いている理由を問うと老夫婦は、「私たちにはもと八人の娘がいたが、高志のヤマタノオロチが来てつきつきと娘を食べてしまいい、今年もやがてオロチが来る時期となった」と答えた。ミコトが、「そのオロチというのはどんな形をしているか」と尋ねると、「その目はホオズキのように真赤で、身体一つに頭が八つ尾が八つあり、その体にはコケヤヒノキ、杉が生え、その長さは谷八つ峰八つに及んで、その腹はいつもただれて血が垂れている」と答えた。そこでミコトは、「オロチを退治するから、その娘を私にくれないか」と申し出した。

老夫婦が喜んで承諾すると、ミコトは娘を櫛(くし)の形に変えて髪にさし、老夫婦に強い酒を作らせ、また垣(かき)を作つて八つの入口を作り、その入口ごとに八つの台を置き、その台ごとに酒を入れた樽(たる)を置いておくように命じた。やが



素戔鳴尊(八重垣神社：重文板絵着色神像)



稲田姫命(八重垣神社：重文板絵着色神像)

てヤマタノオロチがやって来て、八つの酒樽に首を入れて飲み始め、とつとつ酒に酔いつぶれて寝てしまった。そこでミコトは、腰にさした長い剣を抜いてオロチを斬った。そのため、肥の河はオロチの血で真赤に染まった。最後にオロチの尾を切ったとき、剣の刃が欠けてしまった。あやしいと思ったミコトが剣の先で尾を割ってみると、鋭い立派な太刀が出てきた。ミコトは、この太刀は珍しい太刀と思い、アマテラスオオミカミに献上した。これが草薙剣である。(『大社町史』を元に作成しました。)